

事業の名称

# 自治体施設を利用した、茨城大学学修・地域交流促進プロジェクト

## 地域の教育力向上 自治体との連携 学術文化の推進

〔事業責任者〕

(自治体等側)

常陸大宮市 政策審議監 佐藤 宏之

(大学側)

理学部・教授 北 和之

### 連携先

常陸大宮市 企画政策課

### プロジェクト参加者

北 和之 (理学部・教授 担当:総括)

岡田 誠 (理学部・教授 担当:学内ニーズ情報収集)

西野 由希子 (人文学部・社会連携センター 担当:自治体ニーズ情報収集)

河原 純 (理学部・教授 担当:理学部ニーズ情報収集)

長谷川 健 (理学部・准教授 担当:野外実習ニーズ情報収集)

山村 靖夫 (理学部・教授 担当:野外実習ニーズ情報収集)

及川 真平 (理学部・准教授 担当:野外実習ニーズ情報収集)

相羽 明 (理学部・准教授 担当:授業ニーズ情報収集)

桑原 祐史 (工学部・教授 担当:工学部ニーズ情報収集)

松村 初 (教育学部・教授 担当:教育学部ニーズ情報収集)

### プロジェクトの実施概要

#### ①プロジェクトの目的

廃校となった小中学校など自治体の施設を利用し、茨城大学の学修・研修拠点、地域連携活動やサークル活動の拠点と位置付けることで、地域の文化・教育活動および茨城大学の教育・地域貢献

活動・学生福利厚生など、自治体と茨城大学双方にとってメリットある事業を育てる。

#### ②連携の方法及び具体的な活動計画

平成29年度は、利用可能な施設および茨城大学側のニーズをリストアップし、実現に向けての問題点を整理する。現地での調査、意見交換、また参考事例の調査等を行う。自治体側でも、利用可能な施設の状況と問題点を整理し、整備が必要な項目と必要な費用の概算を行う。

#### ③期待される成果

老朽化した大子研修所の代替となる茨城大学の野外実習や学生サークルなどの活動拠点を確立することができる。また、様々な地域連携の拠点を確立することで、茨城大学と自治体両方にとってメリットのある様々な活動を展開することが容易となる。

### プロジェクトの実施成果

#### ①活動実績

##### 1. キックオフミーティング

平成29年7月28日 16:15～

社会連携センター3階ミーティングルーム (M3)

##### 2. 先行事例調査

平成29年12月6～7日

金沢大学、石川県珠洲市施設見学

3. 中間とりまとめ会合  
平成29年12月22日 10:30～  
社会連携センター3階ミーティングルーム  
(M3)
4. 学内ニーズ(教員側利用イメージ)調査  
平成29年12月22-30日(メール利用)
5. 自治体施設調査  
平成30年1月30日 10:00～  
常陸大宮市役所, 施設

## ②プロジェクトの達成状況

前記の本プロジェクト諸活動により, 以下の成果を達成した。

### 1) 金沢大学・珠洲市施設訪問報告

#### 1. 目的

自治体の施設(廃校となった小中学校)を大学が学習・研究拠点として利用し, 地域交流・活性化を行っている先進例として, 金沢大学と珠洲市を訪問し, 施設を見学すると共に, 具体化までの経緯と問題点などについて担当者に聞き, 茨城大学での自治体施設利用した学修と地域交流に役立てる。

#### 2. 訪問先と担当者(写真1-4)

- ・金沢大学地域連携推進センター 宇野特任教授, 出村地域連携推進室業務管理係長
- ・金沢大学能登学舎(旧珠洲市立小泊小学校)  
伊藤特任准教授, 北村特任助教
- ・珠洲市役所 金田企画財政課長
- ・日置ハウス(旧珠洲市立日置小中学校)新谷 珠洲市地域おこし隊員

#### 3. 金沢大学能登学舎について

○きっかけ: 2004年の金沢大学タウンミーティング in 珠洲において, 奥能登に金沢大が拠点(若者が学ぶ機会)を作りたいという提案を行い, 能登半島先端に位置する

珠洲が良い(途中に作るとそれより先には行かない)という意見があり, 珠洲市が対応することになる。また, 珠洲市長が現在の泉谷市長に変わり, 大学連携事業を地方創生総合戦略の大きな柱と位置づけ, 積極的に支援する体制を作った。さらに, 2007年に地域づくり連携協定(包括協定)が, 金沢大, 石川県立大, 輪島市, 珠洲市, 穴水町, 能登町の六者で結ばれる。

○立ち上げ: 2006年に, 珠洲市が旧小泊小学校を4,600万円かけて整備し(辺地対策事業債《国庫80%補助》を財源), 金沢大学能登学舎がスタートする。金沢大学は, 三井物産環境基金による「能登半島 里山里海自然学校」, JST事業による「能登里山マイスター」養成プログラム事業, 三井物産環境基金による「大気観測・能登スーパーサイト」を立ち上げる。また, 珠洲市民によるNPO法人も設立され, 支える活動を行っている。

#### ○主な活動:

- ・「能登里山里海マイスター」養成: 社会人(地元住民, 外部からの参加者)による能登での環境配慮型農林水産業や自然保護・里山保全, 観光など関連産業の人材育成
- ・「大気観測・能登スーパーサイト」: 黄砂・越境大気汚染の国際的観測拠点
- ・「イフガオ里山マイスター」…能登がFAO世界農業遺産に認定され, フィリピンの世界農業遺産イフガオ棚田の保全に関わる活動を現地大学と連携して行う(JICA事業)
- ・スタディーツアー, グリーンツアーを実施
- ・金沢大学生とのかかわりは薄い「学長と行く珠洲合宿」程度, サークル利用なども可能

○運営体制: 現在, 1年間に金沢大が2000万円, 珠洲市が2000万円(過疎対策事業債

《国庫70%補助》を財源)を負担。建物は持ち主の珠洲市が維持、光熱水量は金沢大が負担。常駐スタッフは7名(金沢大が6名の特任教員・PD・教務補佐員、珠洲市が自然共生室を設置し研究員1名を置く)。珠洲市による寄付研究部門「能登里山里海研究部門」。NPOが、地元との仲介(調査フィールドや協力者を探し・仲介するなど)。

○宿泊など：宿泊機能はなく、地元の民宿などを利用。マイスター受講者に地元女性が提供する食堂がある。

○自治体側のメリット：

- ・常駐スタッフや移住者による人口増と地元の協議会に入ってもらっての活動
- ・「能登里山里海マイスター」による地場産業の活発化。地元信金との「創業塾」も開始。
- ・各種マイスター事業での外来者の滞在やスタディーツアー、グリーンツアーの観光客
- ・地元(+外部からも?)子供たちとの自然観察会

○問題点：世代交代(立ち上げに参加した教員がリタイヤし、現在は大学側は特任教員のみ。地元NPOも高齢化が進んでいる)。大学側の予算の維持(外部資金がない時)に、大学全体からの理解が必要。学生の参加が少ない(自治体側はもっと来てほしいと思っているが、大学から遠く、公共交通機関がない)。地元との交流・理解不足(常駐スタッフから見て)。外部資金調達のために次々新たなアイデアが必要。奥能登に高等教育機関(キャンパス)は実現していない。

#### 4. 日置ハウスについて

○きっかけ：若者の定着のため、奥能登に高等教育機関がほしい。金沢大、石川県立大、県立看護大、金沢星稜大と石川県・奥能登2市2町との協定「能登キャンパス構想推

進協議会」。学生の滞在できる交流のための施設。また直接的には、「奥能登国際芸術祭」を2017年に開催し、そのサポーター、スタッフの宿泊する場所が必要となった。

○立ち上げ：2016年度に、珠洲市が旧日置小中学校(現在は中学校舎のみ)を1億円かけて整備し、2017年6月より交流施設(シェアホテル)「日置ハウス」がスタート。定員36名(補助ベッドで増やせる)。

○宿泊など：一般3000円(大学教員も)、大・高校生：2000円、小・中学生：1000円など。

○施設：セルフの食堂、洗濯室。男女別の浴場、基本は8名部屋(2段ベッドが4個)+4人部屋。

○運営：地元住民の管理：予約がある日のみ夜間も管理人が入る。費用負担は、現時点では市の持ち出し(電気代くらいは宿泊料で賄いたい)。

\*珠洲市が、人口1万4千人、一般会計100億円と小さな自治体ながら、これほどのことができる理由：原発の建設候補地で、断念の際に一時金28億円が入った(現在も12億円くらい残っている)。市長が、野村證券に勤務した後のUターンで戻ってきた人で、非常に積極的に進めている。(首長のリーダーシップ・理解が重要)。FAO世界農業遺産への登録。

○大学へのアドバイス：自治体が動きやすい体制を作してほしい。

## 2) 教員から見た自治体施設利用イメージと施設に希望する条件

### 1. 実習施設

理学部・工学部等のカリキュラムの一環としての、野外フィールドでの実習・演習科目を泊りがけで実施する。

人数：50-60名程度まで

設備：

- ・50-60名分の宿泊設備

- ・50-60名収容講義室（スクリーン，プロジェクター，黒板かホワイトボードを設置）
- ・岩石や植物試料など，土で汚れたものを持ち込むことのできる作業室と流し
- ・その他：歩いて行ける範囲に，自然に近い林（スギ林などでない）が必要〔理・生物科学〕
- ・測量実習のため，起伏に富む地形がある〔工・都市システム学科〕
- ・地質学的に重要な露頭へのアクセスが良い〔理・地球環境科学〕

## 2. ゼミ合宿・オリエンテーション

新入生のオリエンテーションやゼミでの合宿を泊まり込みで行う。

- ・人数：10~40名程度
- ・設備：宿泊設備，講義室
- ・その他：懇親会のため，自炊ができるとよい

## 3. その他

- ・ドローンを使った研究・実験
- ・CO<sub>2</sub>観測などの拠点

- \*サークルの合宿など学生主体の活動については，まだ調査していないが，確実にニーズはある。
- \*こども自然教室など，教育関係のボランティア活動の場などでの地域貢献も可能性はある。

## 3) 常陸大宮市施設の現状と茨城大での利用に必要な改修

○立地：水戸キャンパスから自動車で約1時間，JR水郡線駅から徒歩で行くことも可能であり，アクセスは比較的容易である。体育館やグラウンド，テニスコートがあり，運動部やサークルなど学生の利用も期待できる。野外実習への使用については，近くに利用許可が取れる自然林・雑木林が必要になる。

○施設建物：老朽化し現在はほとんど利用していない（県北芸術祭の時には使用）。大規模改修が必要。50名以上が宿泊可能で収容人数には問題はない（写真5,6）。講義等に利用可能な部屋はやや収容人数が少なく，50名以上が無理なく入れるよう，拡大が必要（写真7）。厨房は，家庭用の大型のシステムキッチンが2-3組入るように改修してほしい。人数が大きい時には，ケータリングで対応すべき。食堂はこの人数が入れるとよい。風呂は，女子側が小さく大規模改修が必要（写真8）。野外実習のための汚れてもよいスペースは，バーベキューエリアに隣接した物置を改修することで確保できる（写真9）。

○管理体制：今後自治体との相談によるが，宿泊利用時には管理人が宿泊できる体制が必要となる。

全体評価：大規模改修が前提であるが，要件は満たしており，実現が具体化した。

## ③今後の計画と課題

今年度の活動により，自治体の施設を利用し大学の活動と地域貢献を成功させる具体的なポイントをある程度把握できた。また本学の主に教育活動に関連した施設へのニーズをまとめ，常陸大宮市の施設がそれにおおよそマッチすることがわかった。

さらに茨城大側では学生活動に関するニーズをまとめることが必要である。また，施設の改修に，学生のアイデアを盛り込んだ設計を行うなど，学生や教員がより身近なものと感じられる企画を行うことが，利用を促進し成功させるため重要であると考えられる。加えて，自治体側のニーズを理解し，その期待に応えるような工夫も必要であると考えられる。

現時点で，自治体との協定など，実現に向けたステップに進むことが可能であると考えられ，それにむけた努力を行っていくべきである。



写真 1. 珠洲市役所

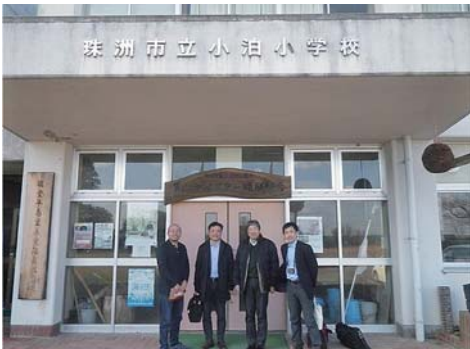


写真 2. 能登学舎



写真 3. 能登学舎打合せ



写真 4. 日置ハウス



写真 5 - 9. 常陸大宮市の施設